

2024.4.11

Dance Base Yokohama



2024年度 DaBYレジデンスアーティストが決定

公募により決定した国内外7組のアーティストが加わり、合計14組のアーティストが活動

この度、2024年度にDance Base Yokohamaで作品創作活動を行うレジデンスアーティスト全14組を発表いたしました。うち、7組は、公募、審査を経て決定した国内外のアーティストで、7名は昨年度より継続活動を行うアーティストです。

DaBYは、2020年のオープン以来、レジデンスアーティスト制度をもうけ、創作やリサーチ、ショーイングなど場所の活用方法を問わずに、スタジオを無償で提供するダンスハウスとして、プロフェッショナルなダンスアーティストの活動支援を行ってきました。

2024年度の公募では、昨年度に引き続きより若い世代に充実した創造環境を提供できるよう、35歳以下を対象とし、また会場提供、広報やテクニカル協力に加え、制作補助費のサポートを要項に加えました。結果、18か国から75件という予想を上回る応募をいただきました。

審査においては、下記の5つの視点で選考を行いました。

選考プロセスの詳細とアーティストディレクター唐津絵理のコメント、アーティストプロフィール及び企画概要は、2ページ目以降をご覧ください。

選考における5つの視点（概要）

- ・ 社会の中でのアーティストの役割を思考すること
- ・ 他のアーティストやスタッフとの対等な関係で創造活動を行うこと
- ・ 経済的、実務的な側面からも、負担が低く実現可能性が高い企画であること
- ・ 国内拠点者：昨年度から継続して、リサーチやショーイングの成果を継続展開できること
- ・ 海外拠点者：DaBYという場への必然性をより強く感じられる企画内容やアーティストであること

<代表者名・敬称略>

○公募決定したレジデンスアーティスト（拠点国） （利用スケジュール順）

- ・ Deva Schubert（ドイツ）
- ・ Dapheny Chen（シンガポール）
- ・ AWPlanet（Alexis Kam/Dynamic Wang）（マカオ/中国）
- ・ Tiia Kasurinen（フィンランド）
- ・ 小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク（日本）
- ・ 藤村港平（日本）
- ・ Niki Verrall and Texas Nixon-Kain（オーストラリア）

○前年度から継続のレジデンスアーティスト （50音順）

- ・ 岩淵貞太
- ・ 柿崎麻莉子
- ・ 小暮香帆
- ・ 鈴木竜
- ・ 橋本ロマンズ
- ・ ハラサオリ
- ・ 平原慎太郎

選考プロセスとレジデンスアーティスト以外のサポート対象アーティストについて

今回の審査においても、皆様の熱量を感じる企画書に、選考は大変苦慮いたしました。下記の5つの視点を選考基準としました。

- プロフェッショナルなアーティストとしての活動を推進したいと考えていること。この場合のプロフェッショナルには、自身の活動を通して社会との接点や観客との関係性の構築を行い、社会の中でのアーティストの役割を思考することを含みます。
- 他のアーティストやスタッフとの対等な関係で創造活動を行うこと。DaBYに集うすべての人々は互いにリスペクトしあい、フラットに意見をシェアするように努めること。
- 経済的、実務的な側面からも、アーティストやカンパニーにとってなるべく負担にならず、実現可能性が高い企画であること。演出・振付家のみならず、創作を共にする出演者やスタッフなどに適正な金額の経費を支払うことのできる予算計画書となっており、助成金の有無を含め、あらかじめ規模が明確なもの。
- 国内拠点アーティストについては、昨年度のレジデンスアーティストに継続的に利用いただくことで、これまでDaBYで行ったりサーチやショーイングの成果を継続してさらなる展開へと繋がっていくことを期待しています。
- 海外拠点アーティストについては、単なるレジデンススペースとしての使用のみならず、日本や横浜といった地域性や歴史性、さらに日本のダンサーとの交流など、DaBYという場への必然性をより強く感じられる企画内容やアーティストであることを優先しました。

また、下記6名にはリハーサルやWSのためのスタジオ利用のサポートと広報協力を行います。

浅川奏瑛(Kanae Asakawa)

阿目虎南

酒井直之

袴田美帆・小坂哲雄

y/n (橋本清、山崎健太)

引き続き、芸術の育成・発展に尽力してまいりますので、皆様にはさらにご支援いただきますよう、あらためて、どうぞよろしくお願いたします。

情報詳細はこちらをご覧ください：<https://dancebase.yokohama/info/10609>

<アーティストックディレクター唐津絵理コメント>

2024年度は5組の公募枠に対して、国内外から75件の応募がありました。沢山の方にDaBYに関心をもっていただけたことを大変嬉しく思うとともに、創作サポートへの多様な角度からの期待とその必要性を痛感しているところです。第二次選考過程でのアーティストへのヒアリングはDaBYと各アーティストの取り組みを共有し、今日の舞台芸術環境に対してアーティストの様々な思考を知ることのできる大変貴重な機会となりました。

今回は前回に比べて海外からの応募が多かったため、単なる創作の場としての使用だけではなく、日本や横浜といった地域・歴史性や日本のダンサーとの交流など、この場所への必然性をより強く感じる企画内容であることを重視しました。また国内拠点アーティストについては、昨年度のレジデンスアーティストに継続的に利用いただくことで、これまでDaBYで行ったりサーチやショーイングの成果を継続してさらなる展開へと繋がっていくことを期待しています。またいずれのクリエイションについても、健全な創作環境を確保すべく、経済的にも実務的にも関係者の皆さまにとってなるべく負担とならず、実現可能性が高い企画であることを優先して選定致しました。

レジデンスアーティスト及びクリエイションをともにする皆さまが、DaBYという場を活用し、集まる方々と交流を行うことで、より豊かなクリエイションとなっていくことを願っています。そして、そのプロセスの一部を拝見できることを楽しみにしています。

公募レジデンスアーティスト（代表者）



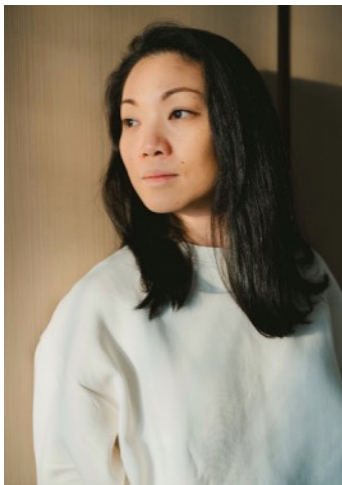
企画

ダンスパフォーマンス『GLITCH CHOIR』は、グリッチという現象をアナログ空間に移し替える。作品の中心にあるのは、グリッチを通した嘆きの唄の再構成である。歴史的に、公的な喪は主に女性、いわゆる哀悼者によって執り行われてきた。彼女たちは報酬と引き換えに、故人に対する他人の悲しみを情緒的に表現した。

二人の女性パフォーマーは、親密な多重共鳴の空間を作り出すことによって、吊いの集合体を開いていく。哀歌にすでに内在している声の歪みの中で、吊いが集団的なグリッチへと変容する。周波数の不協和音からどんな合唱が生まれるのだろうか？

Deva Schubert

ベルリンを拠点に活動する、音楽を専門とする振付家。ザルツブルク、カッセル、コペンハーゲン、H2Tベルリンでダンスを学び、カッセル芸術大学で美術を学ぶ。ダンス、インスタレーション、デジタル・メディアを横断する彼女の作品は、親密さ、集団性、横断的手法の相乗効果といった問題を扱っている。ダンサーまたパフォーマーとして、Isabelle Schradt、Michael Portnoy、Julie Favreauのもと、Venice Biennale、documenta 14、steirischer herbstなどのフェスティバルに参加。2020年にはImPulsTanzの教育・交流プログラムdanceWEBに参加。チューリッヒ美術館、Gessnerallee Zürich、ウプサラ美術館、Radialsystem Berlin、ボルツァーノのTransart Festivalなどで作品を発表した。近年はMosaick CollectivでAIと文化の関連性を研究している。新作の『GLITCH CHOIR』は2023年6月にReinbeckhallen Berlinで初演され、2024年にはソフィエンセールでのTanztage Berlin 2024でオープニングを飾る。



©Jootz See

企画

文化人の労働に疑問を投げかけ、反映させ、批評することで、このパフォーマンスは単なるダンスではなく、対話となり、社会におけるアーティストの本質的な役割についての声明となる。芸術における公平な労働慣行の未来はどのようなのか？

アーティストを欠くことのできない存在として認識するために、どのように物語をつくり変えることができるだろうか？

私たちのダンス・プロジェクトは、芸術的表現であるだけでなく、このような差し迫った疑問に答え、芸術の労働の未来を再構築するための一歩なのだ。

Dapheny Chen

振付家、パフォーマー、教育者、マネージャーの役割を行き来するインディペンデントのダンスアーティスト。ダンスを創り、鑑賞することから生まれる挑発、繋がり、批評性に関心を寄せる。従来のダンス・トレーニングから離れ、社会政治的イデオロギーを検証し、コンテンポラリー・ダンスの可能性を探る。彼女の活動は、時代や状況によって変化する振付やダンスの多面性を包含している。創作プロセスの流動的で一過的な性質を認めながら、彼女は新しい経験を生み出すために、これまでの形式定義を崩していく。Ah HockとPeng Yu (2004)、L.A. Dance Connection (2003-2008)、Frontier Danceland (2010-2011)、Re:Dance Theatre (2012-2015)で踊る。彼女の作品は、Esplanade dans Festival、Huayi Chinese Festival of Arts、NUS Exon-Mobil Campus Concert、Prisma Festival Panama、WDA Asia Pacific Seoul、Cont.act Contemporary Dance Festival、Dance Nucleus' VECTORなどで上演されてきた。芸術文化リーダーシップ修士号取得。

公募レジデンスアーティスト（代表者）



企画

AWPlanetのこのプロジェクトは、身体的な動き、デジタル画像、AIによるコンテンツ生成（AIGC）技術を組み合わせ、交差させながら、探求の旅に出る。肉体を解析し、再解釈することで、仮想のモノへと変換する。現実世界に肉体を持たないAIは、私たちが作り出した身体表現をどのように理解するのだろうか。仮想世界と現実の間で、身体が配置され、解剖され、移り変わるとき、果たしてそれは現実として捉えられるのか、それとも単なる幻影なのか。生命と現実の重要な媒体として機能してきた身体。しかし、こうした状況下で、仮想の情報が氾濫する中、私たちはどこまで真正性を保つことができるのだろうか。これは、感情的な人間の身体表現とAI技術の論理的推論との間の議論的となりうる対話を提示する、視覚的に魅力的で壮大なパフォーマンスとなるだろう。

AWPlanet | Alexis Kam

香港生まれ、マカオ育ち。4歳からダンスを始め、Macau Conservatory Dance Schoolでバレエを学んだ後、北京舞蹈学院バレエ科で学び、2014年にBeijing Dance/LDTXに参加。現在はフリーランスアーティスト、AWPlanet創設者、MonkeyKam Art Channel発起人。Warsaw 24th Lodz Ballet Festival、Suzanne Dellal Centre for Dance and Theatre、Städtische Theater Chemnitz、2013 Macau City Fringe Festival "Solos/Duets Showcase"に出演。2017 Macau CDE Springboard、2023 Hong Kong Dynamic Dance Dialogue Dance Showcaseのゲスト振付家。2020年東京芸術祭APAF-アジア舞台芸術人材育成に選出され、第31回Macao Arts FestivalでDance Duoの全プログラムをプロデュース・上演、第22回China Shanghai International Arts Festival Performing Arts Fair第3位、Pitch Session I: Going to the World、Macau Rollout Dance Video Festivalsのダンス映画公式セレクション、Screen.Dance - Scotland's Festival of Dance on Screen、

AWPlanet | Dynamic Wang

ダンス、演劇、音楽、映像など、複数のメディアや芸術形式を横断する複合的な創作活動を展開している。北京ダンスフェスティバル、Les Années Chine-France、Dance Forum China-Japanのグラフィックデザイナー、Sino-German Jazz Improvise Meeting Festivalの共同企画者、LeEcoグループLe Sportsのビジュアルデザインディレクターを務める。2014年、AWP Experimental Arts Studioを設立。2016年には台湾のHorse Dance Theaterに参加し、BeijingDance/LDTXにゲスト振付家として参加した。2020年、KuaiShouにブランドデザインの専門家として参加。同年、Unsplash Award Photographer of the Yearを受賞し、2022年にByteDanceに参加。

公募レジデンスアーティスト（代表者）



©Tea Kasurinen

企画

この新しいソロ作品では、ジェンダー化されたパフォーマンスとムーブメント、ソーシャルメディアの身体とアイデンティティ、そして詩についての私のリサーチに着想を得ている。また、哲学者・詩人のアン・カーソンによるエッセイ『The Gender of Sound』からも着想を得ている。

周波数、音程、声の表現は、ダンサーの身体と観客にどのようなものを呼び起こすのか。これらのテーマから着想を得て、振付、ドラッグ・アート、音楽によるソロ作品を作るために、ムーブメントを創作する。

Tiia Kasurinen

ヘルシンキを拠点とするアーティストまた振付家で、2017年にStockholm University of the Artsを卒業。アイデンティティ、ジェンダー、視点、ポップカルチャーといったテーマに関心を持ち、視覚的な変容、音楽、動きを通して作品で探求している。彼女の作品では、YouTubeのチュートリアルと身体表現が手を取り合い、明快的な美学を生み出している。

Kasurinenの作品は、Helsinki FestivalやZodiak – Centre for New Dance、New Performance Turku Biennale、コペンハーゲンのGátt Festival、Reykjavik Art Festival (Gátt Hub 2022)、Kuopio City Theatre/Dance Theatre Minimiなどで発表されている。自身のプロジェクト以外では、ダンサー、パフォーマーとして活動し、他のアーティストとのコラボレーションも行っている。



©TDanÅke Carlsson

企画

Dance Base Yokohamaは、私たちにとって、「ダンス」を考える上で非常に重要な拠点のひとつです。私たちは長らく、「ダンス」に於ける主体性と客体性の関係について考えてきて、この機会に思い切って「作品」としての「ダンス」に強く向き合ってみようと思います。2023年度は「継承する身体」と題して、継続して研究開発をしてきた「フィジカル・カタルシス」を「継承」する試みを実施しました。2024年度は、「フィジカル・カタルシス」を実践的に活用した「ダンス作品」の制作に臨みます。メンバーとして、「継承する身体」から引き続き、宮悠介さんと山口静さんにご協業いただきながらも、さらなる新しい方とも出会うことを目指し、「ダンス」を通じて「作品」とは何かを考える時間を過ごしたいと思います。そしてその成果としての「ダンス作品」を、より多くの皆様にお楽しみいただけるよう、ベストを尽くして参ります。

小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク

二人組の舞台作家・小野彩加と中澤陽が舞台芸術作品の創作を行なうコレクティブとして2012年に設立。舞台芸術の既成概念と、独自に研究開発する新しい仕組み(メカニズム)を統合して用いることで、現代に於ける舞台芸術の在り方を探究し、多様な価値創造を試み続けている。固有の環境、関係から生じるコミュニケーションを創造の根源として、クリエイションメンバーとの継続的な協働と、異なるアーティストとのコラボレーションのどちらにも積極的に取り組んでいる。

公募レジデンスアーティスト（代表者）



企画

よく「私の身体は、」なんて言い方をするが、本当は身体は私のものではない。僕は普段、自分の身体を通して何かを考えたり/考えさせられたり、表現したり/表現させられたりしていて、それを自分のこととして引き受けようとしている。けれども身体は、そんな私の一手手前で既に、他の何かを直感していて、まるで子供が車窓を流れる風景の何もかもを口にするように、動きまわる。

私は踊っているフリをしながら
身体を追いかけるが
身体はぐんぐんと遠ざかり
私を置き去りにして
宇宙のどこかのホワイトホールになる

僕は、永遠に辿り着くことの出来ない身体に圧倒されるのだけど、一方では、身体を手放し遠くから眺めることに自由を感じる。

藤村港平

東京、横浜を拠点に舞踊家として活動。2020年以降「身体は如何にして”舞踊する身体”として再構築されるのか」という問いを出発点にリサーチや実験的なパフォーマンスを開始。また、この問いの延長として「ダンスと音楽の関係性」に着目することからダンスの発生を問うことを目的とした作品の制作を行う。2022年には、パフォーマンスにおける積極的意思や主体性を転覆することを試みた作品“対象a”を制作。その他に、音楽を聴く身体の前意味的な経験を扱った作品”PreDanceMusic”や器楽奏者とダンサーの身体知を呼吸という観点から考察する作品“2本のフルートと踊りのための断章”などが代表作として挙げられる。また、フリーのダンサーとして国内外問わず多くの演出家や振付家の作品に出演。

筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。修士論文は「ダンサーの身体に現れる即興的性質に関する研究」。



企画

体現的かつ想像的な反応における現在の活動を基に、Dance Base Yokohamaでの滞在中に新しい振付プロジェクトを探求する。我々の継続的な注意を必要とする進化する社会のダイナミクスを参照して、彼ら自身が作り上げた構造の中で、どのようにバランスが示され、再調整されるかを探求する。テキサスとニキはそのプロセスにおいて、外的な干渉の中で共通の目的に向かっていく間に、絶え間ない進化を遂げる身体経験との関係の重要性を考えている。

Niki Verrall and Texas Nixon-Kain

オーストラリアのナーム／メルボルンでダンスと振付の共同制作を行っているアーティスト。彼らの共同研究は、想像的かつ実践的なレンズを通して題材を吟味し、身体と動きを掘り下げている。

テキサスとニキは、パフォーマーとして他のアーティストの作品に定期的に参加し、Melbourne Fringe Festival、La Place de la Danse Toulouse、Carriageworks、Art Month Sydney、Catapult Dance Choreographic Hub、Vivid Sydney、Sydney Festival、The National Gallery of Australia、The Art Gallery of NSWなど、オーストラリア国内外の様々なアート・スペースでパフォーマンスを行っている。

彼らの活動は進化し続けるものであり、その新進のキャリアが遭遇する多様な領域において、常に再考を試みている。

レジデンスアーティスト（前年度より継続活動）



©野村佐紀子

岩淵貞太

玉川大学で演劇を専攻、平行して、日本舞踊と舞踏も学ぶ。2007年より2015年まで、故・室伏鴻の舞踏公演に出演、今日に及ぶ深い影響を受ける。2005年より、「身体の構造」「空間や音楽と身体の相互作用」に着目した作品を創りはじめる。2010年から、大谷能生や蓮沼執太などの音楽家と共に、身体と音楽の関係性をめぐる共同作業を公演。2012年、横浜ダンスコレクションEX2012にて、『Hetero』（共同振付：関かおり）が若手振付家のための在日フランス大使館賞受賞、フランス国立現代舞踊センター(CNDC)に滞在。自身のメソッドとして、舞踏や武術をベースに日本人の身体と感性を生かし、生物学・脳科学等からインスパイアされた表現方法論「網状身体」開発。玉川大学と桜美林大学で非常勤講師を務める。



©Yurie Nagashima

柿崎麻莉子

香川県出身、元新体操選手。

Batsheva ensemble Dance Company (2012-2014) に所属後、L-E-V Sharon Eyal|Gai Behar (2015-2021) に所属し、世界各国で公演・WS指導を行う。2011年韓国国際ダンスフェスティバル金賞、2013年度香川県文化芸術新人賞、2014年Israel Jerusalem Dance Week Competition、2020年日本ダンスフォーラム賞、2021年日本ダンスフォーラム賞、など受賞。2021年カルチャーセンター「beq」を熊本にOPENし、文化や芸術をカジュアルに楽しめる場を目指して活動中。「GAMAMA」を主催し、オンラインWSなどを実施。Gaga指導者。

DaBY x 愛知県芸術劇場 パフォーミングアーツ・セレクション 2023にて『Can't-Sleeper』演出・振付・出演など。



©Yuka Uesawa

小暮香帆

国内外で自身の作品を発表しながら舞台、ライブ、メディアなど境界を越えて動きの美学を展開。ダンサーとして笠井叡はじめ多数振付家作品に出演、海外ツアーに参加。近年は他ジャンルのアーティストとのコラボレーション、映画への振付、パリコレクション出演など活動の幅を広げている。めぐりめぐるものを大切に踊っている。

DaBY x 愛知県芸術劇場（パフォーミングアーツ・セレクション 2024）にてハラサオリと新作を発表予定。

レジデンスアーティスト（前年度より継続活動）



©Takayuki Abe

鈴木竜

2020～23年度DaBYアソシエイトコレオグラファーとして、DaBYと愛知県芸術劇場の共同製作企画にて、多数の作品創作を行う。2021年、愛知県芸術劇場にてコロナ禍で現代社会における「身体の不在」をテーマに3つの新作を発表。2022年、インド、国内で再演を重ねたほか、欧州文化首都Kaunas2022(リトアニア)にて初の欧州での振付委嘱(改訂版)を受ける。2023年、サマセット・モーム著の短編小説『雨』から着想を得たフルイブニング作品、愛知県芸術劇場×DaBYダンスプロジェクト『Rain』を現代美術作家の大巻伸嗣、サウンドアーティストのevalaとともに創作。国内4ヶ所、香港のNew Vision Arts Festivalにて上演する。同年、「大巻伸嗣 Interface of Being 真空のゆらぎ」(国立新美術館)にて、パフォーマンスへのディレクション/出演を担当。



橋本ロマンス

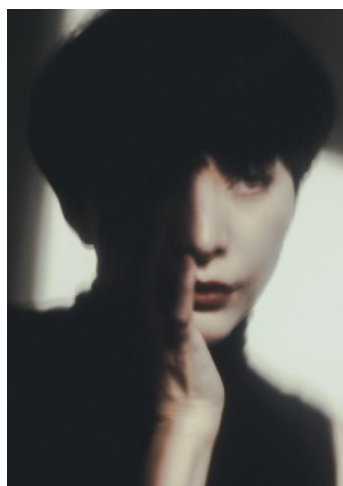
1995年生まれ。東京都出身。

コンセプチュアルな手法を用いながらも、ポップ/ストリートカルチャーの要素を取り込むことでアートファン以外にも訴える魅力を持つ同時代性の高いパフォーマンスを制作する。

作品を構成する全要素に一貫した美意識とヴィジュアル、様々な文脈を分解しコラージュの如く再構築することで作品テーマを多面的に分析し新たな仮定を提示するスタイルが特徴。

「トーキョー・ミステリーサークル・クラブ・バンド」 SICF20 PLAY部門グランプリ(2019)、

「サイクロン・クロニクル」横浜ダンスコレクション2020 最優秀賞新人振付家賞(2020)受賞。横浜ダンスコレクション2021にて、ファウストやダンスマカブルをモチーフにコロナ禍における人間の孤独と死生観を描いた「デビルダンス」を上演。



©Mana Hiraki

ハラサオリ

振付家、ダンサー、美術家

ベルリン在住。デザイン理論に基づいたパフォーマンス作品の制作を通して、サイトスペシフィックな空間と時間における即物的身体の内実を探求している。それに伴い、テキスト、ドローイング、映像なども扱う。近年ではダンサーであった実父との生別/死別を扱ったセルフドキュメンタリー作品「Da Dad Dada(ダダッドダダ)」を日本とドイツの二カ国で上演、翌年2019年秋にはDance New Airにてパフォーマンス作品「no room」を発表。第9回エルスール財団新人賞コンテンポラリーダンス部門受賞。

DaBY x 愛知県芸術劇場（パフォーミングアーツ・セレクション 2024）にて小暮香帆と新作を発表予定。

レジデンスアーティスト（前年度より継続活動）



©Eiji Takahashi

平原慎太郎

クラシックバレエ、HipHop のキャリアを経てコンテンポラリーダンスの専門家としてダンサー、振付家、ステージコンポーザー、ダンス講師として活動。

また、ダンスカンパニー【OrganWorks】を主宰し創作活動を行う。

国内では前川知大、小林顕作、白井晃、長塚圭史、稲葉賀恵らに振付提供、その他ダンサーとしても大植真太郎、森山未来らとの談スや、美術家塩田千春などとのコラボレーションなど他分野のアーティストとの交流も盛んに行う。

2021年TOKYO2020オリンピック開閉会式総合振付担当。2022年神奈川県見ホール「浜辺のアインシュタイン」演出・振付。